

2017年9月26日 全4頁

# ブレグジット交渉打開に向けたメイ首相の演説

交渉の切り札になるかは未知数

ユーロウェイブ@欧州経済・金融市場 Vol. 96

ロンドンリサーチセンター シニアエコノミスト 菅野泰夫

## [要約]

- 9月22日に英国メイ首相は、イタリアのフィレンツェにて、こう着するブレグジット交渉打開に向けての演説を行った。1月17日のランカスター演説、3月29日の50条行使書簡に次いで今年3回目のメイ首相の意思表示となり、6月の総選挙で辛酸を舐めたメイ首相が、従来のハードブレグジット路線のスタンスをどれだけ軟化させたかを見極めるためにも、一語一句が注目された。
- 演説内容で最も注目されたのは、交渉がこう着状態に陥った主因といわれる「手切れ金」に関する内容であった。EU側が強固に「手切れ金」に執着する理由は、EU予算への分担金において、加盟国間で最高額の水準にある英国の離脱により、複数年編成のEU予算に大きな影響が出るためといわれている。ただ今回の演説では「手切れ金」の支払いは認めたものの、その金額については何も言及がなかった。
- メイ首相は演説後の記者からの質問に対して、“不利な契約を結ぶくらいなら契約がない方がまし (no deal is better than a bad deal)” と過去の発言を引用し、従来の強行離脱路線に変化がないことを印象付けた。しかし“英国とEUと独自の貿易協定を締結する”などの主張に目新しさはないうえ、過去の演説と同様に具体策に乏しいと見る向きも多い。英国世論では今回のメイ首相の演説を支持しないとの意見も多く、“これだけ悪い演説ならやらない方がまし (no speech is better than a bad speech)” と発言を揶揄する声もあった。

## ブレグジット交渉打開に向けて、メイ首相がフィレンツェで演説

第3回までの協議を8月に終えたブレグジット交渉は、決定的な進捗に欠け、英国 EU 双方の非難合戦に発展している。英国の準備不足を批判し、離脱に伴う3つの優先課題（EU市民の権利、「手切れ金」、アイルランドとの国境）が解決されない限り、（貿易協定・関税協定等の）将来の取り決めについての交渉に進むことをEU側は拒否している。一方、英国側は将来の関係性がどうなるか分からない以上、離脱協定への合意は不可能として、柔軟な対応を求めている。

そのような中、9月22日に英国メイ首相は、イタリアのフィレンツェ<sup>1</sup>にて、こう着するブレグジット交渉打開に向けての演説を行った。1月17日のランカスター演説、3月29日の50条行使書簡に次いで今年3回目の（ブレグジットに関する）メイ首相の意思表明となり、6月の総選挙で辛酸を舐めたメイ首相が、従来のハードブレグジット路線のスタンスをどれだけ軟化させたかを見極めるためにも、一語一句が注目された。

図表1 メイ首相のフィレンツェでの演説の主要ポイント

### ①単一市場・関税同盟・欧州司法裁判所（ECJ）法域からの脱退を明言

従来からのハードブレグジット路線は堅持。離脱後、ECJが英国・EU間の貿易紛争解決の調停役になることは受け入れない。EU市民の権利についての決定は、ECJの判決を考慮しながらも、英国法廷が行う

### ②約2年間の移行措置（Transition Period）の設置を提案

その間は、単一市場へのアクセスを維持（英国・EU双方から）。ただし移行期間の間は、英国にはその状況について発言権なし。期間限定であるが故に相互に移行期間設定を保障（ダブルロック）する必要性を明言

### ③英国がEUに対し2020年度までの分担金の支払いを約束

事実上の「手切れ金」、事前報道の「200億ユーロ」という金額に対する言及なし。英国の離脱によりEU予算に及ぼす影響が内容に配慮を示すものの、それ以上の支払いがあるかどうかは不明

### ④単一市場へのアクセスはあくまでも英国独自の協定を目指す

カナダ型やEFTA加盟国やEEA加盟国（ノルウェー型）とは違う、クリエイティブなアプローチを目指す。

（出所）各種報道より大和総研作成

13時30分頃から開始された演説では、①単一市場・関税同盟・欧州司法裁判所（ECJ）法域からの脱退、②約2年間の移行措置（Transition Period）の設置、③EUに対して2020年度までの分担金の支払いを約束（事実上の「手切れ金」）、④独自の貿易協定の締結、などを主に取り上げていた。過去2回の演説と比較すると、EUに対する姿勢が若干軟化している印象は受

<sup>1</sup> 最近の歴代英国首相は特別な演説の時には欧州の主要都市をその場を選択している。当日、フィレンツェでは交渉や会議などが予定されていたわけではなく、英国が離脱後もEUと深く特別な関係を求めていくことを強調するため、欧州の歴史的な中心地であった同地が選択されたという。

けたものの、事前に報道されていた演説要旨<sup>2</sup>から大きなサプライズもなく、従来のハードブレグジット路線からの転換を示す内容とまではいかなかった。

## 交渉がこう着状態に陥った主因は「手切れ金」

演説内容で最も注目されたのは、交渉がこう着状態に陥った主因といわれる「手切れ金」に関する内容であろう。EU側が強固に「手切れ金」に執着する理由は、EU予算の分担金において、加盟国間で最高額の負担水準にある英国の離脱により、複数年編成のEU予算（現行2014～2020年）に大きな影響が出るのが確実なためといわれている。これら「手切れ金」の合計額は過去の報道では400億ユーロ～1,000億ユーロとも言われていた。このため、EUから離脱すれば分担金を支払う必要はなくなり、その金額を国民保険サービスの拡充など英国内で有効利用すべきであると主張するEU強硬離脱派が猛反発を起こしていた。特にボリス・ジョンソン外相は9月17日の日曜紙への寄稿で、離脱に関する自らのビジョンとして、離脱後の関税同盟や単一市場への残留を求めず、（単一市場へのアクセスに分担金を負うべきではなく）不要となるEU分担金を国内で有効利用すべきであるとの強硬離脱論を改めて展開した<sup>3</sup>。外相は、報道されている「手切れ金」の金額は法外であり検証された金額のみを支払うと発言している。さらに、法的根拠がないので支払義務がないと「手切れ金」の支払いを一切拒否すべきであるとする保守党議員もいた。このような事情もあり、「手切れ金」に対するコミットメントを求めるEUに対し、英国が明確な言及を避け続けたことにより、交渉は暗礁に乗り上げていた。無論、産業界からの圧力もあり、関税同盟や単一市場へのアクセス維持に向け数年の移行期間を設け、その見返りとして「手切れ金」を支払うことが、ほぼ規定路線とみられてはいる。しかし演説の直前には、従来報道されていた額を下回る200億ユーロ程度（英国が受領する補助金分を差し引くネットでの金額）との観測が流れ、EU側からの反発が予想されていた。

今回の演説では「手切れ金」の支払いは認めたものの、その金額については何も言及がなかった。無論、メイ首相は、この金額が交渉において最大の武器になっていることを承知している。今、この金額を提示してしまえば、その後の貿易協定交渉での切り札を失うことになることは誰の目にも明らかであろう。英国がEU予算の穴を埋めることは、加盟国の懸念を払拭し、確かに交渉の前進には繋がるとはみられていたものの、移行期間中の分担金拠出とみなされる程度の金額のオファーでは「手切れ金」の問題はなくならないと主張するEU関係筋もある。EUは英国が加盟国として約束した2020年までの複数年編成予算に対するコミットメントについて、その実施時期が離脱後になったとしても、確実に果たすことを求めている。ただ、それであればその編成予算年までは分担金を支払う代わりに、移行期間として、単一市場のアクセスを認

<sup>2</sup> 演説前日の9月21日、メイ首相は演説草案を閣僚に配布し、閣議でその内容についての説明を行っている。それによれば、ボリス・ジョンソン外相をはじめとするEU懐疑派が許容する最大2年間の移行期間を求めるとともに、具体的な金額への言及はないものの、「手切れ金」についてオープンで寛大な提案をし、今秋には、貿易協定など将来の取り決めの交渉に進めることを目指すというものであった。ただ首相側近が演説内容の微調整の可能性を示唆したため、22日午後まで様々な憶測が続いた。

<sup>3</sup> メイ首相がスタンスを変えるのであれば、外相辞任をも辞さない姿勢と報じたメディアもあり（ただ外相は辞任報道を否定）、離脱を巡り閣僚内に不和があることは想像に難くない。

めさせ、クリフ・エッジを回避しようとするメイ首相の思惑が透けて見える。

## 今回の演説がブレグジット交渉の打開に繋がるかは未知数

メイ首相は演説後の記者からの質問に対して、“不利な契約を結ぶくらいなら契約がない方がまし (no deal is better than a bad deal)” と過去の発言を引用し、従来の強行離脱路線に変化がないことを印象付けた。

しかし“英国と EU と独自の貿易協定を締結する”などの主張に目新しさはなく、過去の演説と同様に具体策に乏しいとみる向きも多い。英国世論では今回の演説を支持しないとの意見も多く、“これだけ悪い演説ならやらない方がまし (no speech is better than a bad speech)” と揶揄する声もあった。特に移行期間に関する期限や内容（単一市場のアクセスを維持）は、英国が一方的に、EU からの保証を求めているように見える。実質的に当初から決定していた 2020 年までの EU 予算分担金を「手切れ金」として 200 億ユーロ支払う代わりに、(EU から EEA 加盟国に移行して)50 条行使後に定められた EU 離脱の期限の 2 年間の延長を求めているにすぎない。英国政界からは結果的にブレグジットによる経済的な痛みを遅らせただけとの批判も少なくない。労働党のコービン党首は演説後にコメントを出し「保守党内部での交渉の産物のようだ。デービット・デービス離脱相とボリス・ジョンソン外相を押さえつけるための演説だ。移行期間についてはこれまで議論されており、国民投票から 15 ヶ月たった現在に、私達が既に知っていることについてただ演説しただけ」と痛烈に批判している。一方、スピーチの直後に、バルニエ EU 首席交渉官は声明を発表し、「今後の EU と英国の関係について建設的な内容であった」と一定の評価を示した。ただし「交渉は 2018 年秋までに離脱協定に合意に達する必要がある、次のブレグジット交渉で、英国側から具体的な説明を求める」と具体性に欠けた演説内容に対して牽制も忘れなかった。特に 10 月には保守党党大会で、英国内でのメイ首相の演説も予定されており、国内世論に配慮して一転して EU 側に厳しい内容を突き付けてくることを警戒しているようにも見受けられる。

当初 9 月 18 日の週に予定されていた第 4 回のブレグジット交渉は、9 月 25 日の週から実施されている。メイ首相の広報官は、フィレンツェでの演説が延期の理由ではないとし、英国 EU の双方が次期交渉までに時間を取って協議することが、交渉に柔軟性を与え、さらなる進捗を可能にするとの考えから、延期に合意したとしている。その真意はどうか、メイ首相の提案を受けた EU 側がどのように答えていくか、交渉の行方がますます注目される。

(了)